

品は廣く販路を擴大し、需要に應じきれない程であるが、それが爲に自家用炭に不足を來し、約三千噸程他の炭礦から未洗粉を購入し平發電所に使用してゐる。

内郷村報の 六大使命

- 一、政黨政派を超越して、村力充實主義を標榜す。
- 二、村内公私各機關の活動状況を報導し併せて其協調を計り、遠親和郷努力の實現を期す。
- 三、本村共濟事業の徹底を期す。
- 四、村内の善事美行を表彰し、且之を獎勵す。
- 五、本村及本村出身者及本村關係者との聯絡を計り、且其發展向上を期す。
- 六、餘餘力を以て、國民善導に當る。

内郷村報

天一人則
ニ從順ナ
ルベシ

先生方と父兄方とに

御相談

大内民惠

記者 は本紙三、四月兩號にわたつて、國體觀念涵養具體案を連載し、敬神崇祖の思想は、小學校の第一學年からの養成を開始すべき事を痛論し、且之を熱望して、二千五百の讀者諸君に頼つと共に、文部省各局課に貳百部、本縣學務部を通じて、全縣下各小學校及中等學校に合せて五百五十部を贈呈したのであつた。而して五月上旬、長崎市に開催せられた

全國 小學校教員會大會に於て、「國民精神涵養上特に留意すべき事項如何」といふ諮問案に對する答申案なるものを見るに及んで、大に我意を得たるを喜ぶと同時に、徹底的に之が實現を期したいといふ念願を起したのである。答申

案は五項より成り其**第一**項は、國體觀念を明確にし、國民的信念を鞏固ならしむる事、**第二**項は、聖旨を奉體し實踐指導を努むる事、**第三**項は、祝祭日並に國家的記念日等に於て恒例的指導を徹底する事（以下略）**第四**項は、感恩報謝の念に努むる事、**第五**項は、毎朝家庭に於て神佛を禮拜せしむる事、**第六**項は、奉安所に敬禮せしむる事、**第七**項は、神社佛閣墓所等を禮拜せしむる事、**第八**項は、節句祭葬等の傳統的行事に理解を與へ民族的心情の陶冶に資する事、（以下略）
以上二項中の六目の如きは實際記者の

主張 と、殆ど符節を合せた様である。或は記者のそれを其まゝ採用したのではないかと思はれたのである。そこで記者は、先づ我村の先生方と父兄方とに、御相談をしたいと思います。以上答申中の六目は、我國刻下の實情に徴して、全國小學校教員代表諸君が、慎重審議の上、振り出した**手形** 涵養上どうしても行はざるべからざる問題であつて、此精神を徹底すれば、國民教育の目的の大半は、達したる事になるのであると思はれる。

之を従來の實際に徴するに聲明したか、決議したか、答申だとかいふものは、何れも其場限りのものであつて、之が徹底的實現實行は殆ど見た事がない様である。今や我國は空前の**非常** 時、國を擧げて大に之が打開に當面すべき秋なのである。故に記者は我教員大會の決議答申を、空擧之が絶對的徹底を期したいと思ふのである。先づそれには、先生方も父兄方も**第一**項**第一**目たる

聖旨 を奉體して實踐指導に努むる事である。次に第二項**第一**目、毎朝家庭に於て神佛を禮拜せしむる事等に就いては、先づ先生も父兄も、其家庭に神棚佛壇（或は靈壇）を完備清祓し、（先生方の家庭には其が殆どないと思ふ）

毎朝 の禮拜を開始すると同時に、學校に於ても家庭に於ても、兒童に對して其を教へ、其を實行させる様にするのである。先生からの命令とあれば、兒童は何を措いても之に服従するものであり、それに父兄が拍車をかけるに於ては其効果は直ちに顯はれる事は明かである。而して漸次他の項目に進むのである。此等の事さへ、精神的に實行出来ることすれば

國體 觀念を明確にする事固にする事も、將た感恩報謝の念、敬虔心陶冶等も、知らずの間に、功を奏するに到る事は必然である。希くは先生方も父兄方も、記者の此相談に乗つて下さる。乞ふ所より始め、先づ我内郷村から、文部省に振り出した手形の支拂を了する様にせられん事を、熱望に堪へない次第である。

筆序 にこれに關聯した話を紹介して置く。記者は本紙三、四月號を贈呈したる校長に、先生のお宅には神棚や佛壇がありませんかと尋ねたら、神棚はあるが、我々は轉々其居を換へねばならぬのでお粗末になつてはと

佛壇 の方はないとの事であつたので、記者は幼少の折から出入して居つた二本松町の素封家七島家の人々は、旅行する時でも必ず御名號を携帶し、宿に着けば、其を床の間に安置して居られた事、記者は其精神に感激して、三十年前渡米するに際し

墳墓 の土と、祖先の戒名納め、今日に到る迄、それこそ南船北馬、到る處之を奉じて、毎朝禮拜して來たのであるが、敢て粗末にならざると思はないと話した處が、同校長は、虚心坦懐此舉を贊し、直ちに佛壇を備へる事を言明せられたので記者は大に意を強うした事であつた。若我全村の先生方も父兄方も、神棚佛壇の設備なき向は、是非共此校長の態度を學んでいたゞきたいと思ふのである。

本紙發行は内郷一家の事業にして、其の社説は子孫に對する遺言を兼ねるものなり。

本紙定價 一冊五錢 一ヶ月一元
發行所 内郷村報社
編輯發行所 内郷村報社
印刷所 大内民惠

方面委員の活動

五月二十八日午後一時より村役場に於て例會を開催し、左の諸件を協議決定し、更に活動を開始する事を申合せた。

- 一、助成會々別に基き各役員に囑託状を發する事
- 二、助成會聯合役員會を開催し會費徵收方法を決定する事
- 三、追つて各支部に於て委員會を開き諸般の打合せをなす事
- 四、六月開催せらるべき石城郡聯合方面委員會に本村方面委員會より

方面委員の取扱事項

昭和九年五月分

- 一、生活扶助、法令による者二、然らざる者一八。保健救療、法令による者五、然らざる者四。児童保護、法令による者二五。相談指導三一。戸籍整理七。職業其他紹介二八。教化一四其他二。計一五五。
- 第一種世帯數四二、人口一四三。第二種世帯數一一三人口四七八。第一種より二種へ變更世帯數三、人口八
- 生活安定世帯數三九、人口一一七。救護停止世帯數二人口七。行方不明世帯數二

人口五。以上

比佐代議士

五月二十七日午後六時より宮小學校に於て、同代議士

第六十五回議會報告政談大演說會開催、武富濟、松谷兩代議士、萩原、草野兩縣議等應援。聽衆二千の盛會であつた。

兒童教育後援會

内郷村兒童教育後援會は創立以來茲に數年(會長沼田濱之助副會長石橋弘毅顧問大内民惠)宮、高坂(支部長兼會計猪狩喜平治幹事長渡邊孝義安藤辰五郎監原才太郎星新吾)綴(支部長山崎辰亥副支部長佐藤久太郎根本林平會計佐藤今朝次)の三支部に分れ、貧困兒童の救濟、體育獎勵、兒童衛生、其他教育上必要なる援助等を目的とする縣内に其例を見ざる特志團體であるが、其八年度の事業及收支決算は左の通りである。

△高坂支部

新入生二三〇名に計數用具寄贈。六年生東京方面修學旅行の際貧困兒童十四名に旅費寄贈。運動會に樂隊及賞品寄贈。貧困兒童に學用品寄贈。講演會費寄贈。校庭植樹費寄贈。遠足附添保護。暴風雨洪水の際通學路警戒等。

収入、會費二二八圓七〇錢
前期繰越金一三六圓五一錢
合計、三六五圓二〇錢
支出一八〇圓一二錢
差引殘金、一八五圓〇九錢

△綴支部
運動會樂隊寄贈。練習帳二六五七冊寄贈。講演會費寄贈。新入生へ祝餅寄贈。卒業祝亦寄贈。

収入、會費、七九圓八五錢
前期繰越金、八七圓七五錢
合計、一六七圓六〇錢
支出、九九圓八五錢
差引殘金、六七圓七五錢
△宮支部、(次號掲載)

臨時村會

五月、四日開會、

議案第一號
寄附採納の件
一、平形ピヤノ 一臺並に附屬品。右は本村第一小學校備品として野木龜之助外百九十名より寄附につき採納する事とす
議案第二號
昭和九年度歳入出追加更生豫算。其歳入出金額拾貳萬七千七百四拾八圓也。

旅日記の一節
九州にて多喜子
(上略)
長崎といふ町は實に坂の多い所だと思ふ。茂木枇杷の稱あるだけに山一面枇杷の木で袋がかぶせてある。天草島がはるかに見えてよい景色だ。御詠歌の御連中が大勢乗り込む。母上様を思ひ出す。波一つない風で船が進むにつれて御詠歌をなへる人もあり何もいはいれぬよい氣持だ。二見も皆に可愛がられ中々の人氣である。二見がれむつたので親共も少ししむる。目がさめたら天草が眼前に展開し、其美しき新鮮さ、思はず驚嘆の聲を發した。(下略)

越えて二十八日村議協議會を開き、小學校敷地及建築に關する件を附議した。尙既報學級増加の結果各校舎増築を決定する事となつた

◎本紙贊助金寄贈芳名
金壹圓 藤下 吉野久之助
金貳圓 平町 藤田 榮助
金四圓半 川俣 大野 運吉

發行所 日本評論社
東京橋本三丁目
取次所 内郷村報社

利(高坂) 川又(内郷) 六
△走巾跳 川成(高坂) 高
米四十二、

内郷村共濟會役員並會員各位

昭和五年以來私共が中心となつて各位の御援助を煩はし且つ戴いた會費の收支決算は其都度内郷村報紙上に報告した通り其書類と現金とは全部内郷村役場に保管してありますから何時でも御閱覽下さる様御願ひいたします尙共濟會は本紙既報の通り内郷村方面事業助成會と改稱し其組織及役員を改めて新に各位の御賛同を御願する事になつて居りますから併せて御諒承を願ひます
昭和九年六月一日

内郷村共濟會々長 沼田濱之助
同 副會長 大内民惠

矢野 恒太 大内民惠 著
服部 宇吉

教育制度改革概論

(四六版二二頁 定價五十錢 郵税六錢)

縣下棋界の覇權を握る

宮下三段 祝賀圍碁大會
濱崎初段

初段の棋客であつたに拘らず學生が此様な方面に没頭するの不可を説き常に棋界人の精進を擧げなかつた而も先天的に父君の血を承

我國教育學界の權威
前京大總長小西重直博士
吾を寄せて曰く、多年ノ御體験下實地ノ御試練ニ基キ眞摯愛國ノ大精神ヲ拜味仕リ不思議ニ打メテ中候云々。

態度を物語るものであり今日尙多忙な事務に従事する立場上無節制に興味に没頭する場合は度れる意味から自宅には一面の盤をも備へ

内郷村幸

附録

行發日一回一月毎

紙本 年一 部一 金五 共拾 入錢

郵政特准掛號認爲新聞紙類

大内氏 庶民

平活版所

君よ！静かに

眠つて呉れ給へ

濱崎善三郎



(氏之重井川の日しり在)

これは去る四月十五日平町九品寺に於て舉行せられた、故醫學士川井重之氏の告別式に、其親

敬愛惜がなかつた川井重之君、

友たる濱崎法學士が聲涙俱に下り辛うじて述べられた弔詞の大要であります。記者も川井氏生前知遇を辱うし、且つ記者の教子の桑野博士が川井氏と同窓同級であつた關係上、其代理をも兼ねて式に参列し、感涙にむせんだ一人であります。

(記者)

世の多くの人々のなげきかなしみの中に君は四十三歳を一期として去る十三日遂に永眠した。私は君の一生を憶ふに萬感胸にせまり、轉た悲愴、弔詞をさぐる氣力もないのであるが、友人諸氏のたつてのすゝめもあり敢て、に吾等の人生訓ともなる君が善戰苦闘の一生を追憶し以て聊か弔詞に代へたいと思ふ。

●悲劇中の最大悲劇は何と云つても、今より七年の昔、昭和二年先夫人の忘れ形見で一つぶ種の愛嬢を喪つたことであらう。それは今思ひ出しても涙の種であるが、昭和二年八月二日愛嬢和子さんはお父さんが座敷で友達の瀬尾さんと好きな甚を隣んである最中、遙かに新潟から見えたいさこさん瀬尾さんの娘さん達を自ら海岸に案内したのであるが、どうしたはずみであつたか不幸一瞬間豊間の濱の荒波は此の可憐の少女を沖合迄か

であつた。如何なる苦楚をなめても人生は強く生きて行かねばならぬと云ふのが、私の信條であるが此の信條は君に學んで得るものが殊に多かつた。

●君の略歴としては

明治二十五年山梨縣東山梨郡日川村に生れ

群馬縣太田中學校卒業

仙臺第二高等學校を経て

東京帝國醫科大學に學び大正八年卒業

大正九年福島縣立回春園院長として就任し

昭和五年二月同園を退職

昭和五年三月一日平町に開業爾來滿四ヶ年

病氣靜養の爲去る三月三十一日小名濱に轉居するに至つたのであつて、一見何等奇きすべきなきが如きも、此の履歴の内に多くの悲劇が織り込まれてゐるのである。

●其折君は自分に對して、君の生立ちからの事夫らるゝ語り聞かせるのであつた。聞きつゝ、われはこんな不幸な人が世の中に又あらうか驚きも同情にも堪えなかつた。

●「自分がまだ母の胎内にある頃父は事情あつて米國に渡つた。母は自分を生かすさつ間もなく實家に歸り他家に嫁入つてしまつた。自分は祖父母其他の人々に育てはぐくまれた。幼少の頃はよその子供が御菓子や喰ふのに自分はお小遣ももらはず、よその家の糸車をビュ／＼とまわしてその御禮にもらつた金で、菓子を買ふ有様であつた。物心づいてから米國にゐるまだ見ぬ父がなつかしくして幾十本かの手紙を出したが、遂に生涯一本の返事も貰ふことが出来なかつた。その父もさうさう彼地で客死してしまつた。

●高等學校から大學への學資金も容易でなかつた。最初の家内は自分とは相思の間柄さう云ふべき仲であつたが、結婚が出来ず新潟の方に嫁に行つてしまつた。自分が大學に居る時代少く病氣をして片瀬に療

養に行つて居た。時たま大學病院に通つて居た。あるとき、病院の廊下を通るさ覺えのある名札が、つてゐたから、調べて見ると新潟に行つた忘れ得ぬ女の名前で、聞いて見るさ男の子一人を生んだのであるが少し肺を悪くして入院してゐるさ、嫁入先の人達はさういふさか夫も家の人達一人も見舞にも来てくれない情ない有様であるさ云ふさ、もう自分は夫の家に歸る勇氣も氣持もないさいふささであつて、全く同情した。

●あるとき見舞に行くさ棚の上に小説がある、さほりを入れてある所を讀んで見てさいふさいふから聞いてみるさ「女さいふものは若い頃のなつかしい思出はたさへさへ行かうささ忘れ得るものではない」さいふ様な意味の事が書いてあつた。同情は戀さもあり、いろ／＼のいきさつがあつて、遂に結婚するやうになり大正九年此の回春園に來たのだが、翌十年には家内は病氣の爲娘の和子獨りを生んで死んでしまつた。これからは少しは樂ませ得やうさいふのに、返す／＼も殘念であつた。それから自分は亡き妻の忘れ形見の和子一人の成長を樂しみに、可憐な病人を友として好きな甚に憂鬱を忘れて來たのであるが、その後世話を來たのであつて二度目の家内を貰ふたのである。之は女學校も出ながら心掛のよくない品行も悪い女で、自分はつく／＼いやになつた。御飯を食へやうさ膳についてお椀の蓋をさつてみるさ自分のお汁には卵が見えいつてゐる、隣のお汁の椀を見れば卵は

(以下二面へ續)

(一面より續き)
 ない。お父さんはいらないから和子にあげやうと答でてつて子供の腕に移してやる。家内が柳眉をまかだて、膳の上の茶碗も皿もたまちぶつ、けて叩き壊してしまふやうな事もあつた。あるときは和子を連れ出して行方不明になり、非常に心を痛めたが、そのときは村の大勢の人々が漸くさがし出して呉れた。個の人も見兼ねてさういふ離婚したのであつたが、離婚にも随分骨が折れた。

(三)

●語る人も泣き聞く私も泣いた、そして心から真に同情した。こんな事を話す以上は或は、萬一の事を決心してゐるのではないか。心配して、慰もし勇気づけもした様に覺えて居る。和子さんは氣立てのやさしい美しい顔の人であつた。小學校の成績は優等を通り越して抜群であつた。亡くなつた時は九歳で尋常三年であつた、亡き愛妻の忘れ形見なだけそれだけ川井君の心中はつらかつた。和子さんのお葬式の時私は弔詞をさげしたが、今又余り年へだてないで、に再び君の靈前に弔詞をさげようか。

●ほんとうに川井君の一生は、苦悶の一生であつた。こうまで惨酷な一生といふものがあつてあらうか、それより川井君は克く之等のあらゆる苦悶の波を乗り越えて行つた。不撓不屈の精神で飽くまで苦闘した。そこに君の高き人格と深く人生に徹した心づかぬ味があるのである。

●そうしてこんなにも苦悶をし盡した人にも似ず、君の人柄は寔に濃厚で、人なつこく親切であつた。ユーモアもあれば、軽い皮肉もあり、滑稽もあつた。春の花見に假装もあれば、友人の結婚披露の餘興に、ドンツクナ、ドンツクナの掛聲諸共、スリッパを振りまわして花嫁さんの度胸をぬく位の事はお茶のこであつた。

●しかも専門の醫者の職務になることは亦頗る熱心で、熱心の域を通り越して獻身的であつた。特に和子さんを亡くした後の君は可憐な病人のためには己が命を捨つるも敢て厭はぬと云ふ覺悟が働かれた大學時代首席を争つた秀才の上に

みがきにみがいた技術で、それに心を込めたる親切で診察されるのであるから、どんな患者でも君になつた。そして不治の病ともいはれたものが君の方で全治したものは枚擧に遑がない。今此の席に列してゐる私の娘は幼いき呼吸器がまても弱くて、かゝりつけの醫者からはもう駄目だと宣告された有様であつたが、君の手によつて立派に更生した。其折かゝりつけの醫者が、川井さんはそんな強い薬を子供にのませてよいだらうかと驚いて話したものであつた。



大正三十三年和子さんと父の對中局 (氏進之善尾瀨は央中) 達友基は三人の方後

それは知る人のみな驚く程でありひつげりだ。それが原因で君の病勢を重らせるやうでは大變に注意した。さうあつたが、氣の毒な病人を見ては手加減は出来んなア。何時も云はれたことであつた。●今の奥さんを待たれたことは大早に雨を得たが如く、暗夜にさしびを得たものと吾等一同は喜んだ。第二の夫人のやうな人も世の中にはまゝあるのに、今の奥さんはそれは、夫に對しよく盡されたと思ふ。君の家を訪問する毎にそのかじつかれる有様、病の主入をいたわられる有様には、感じ入る人さでなかつた。吾等は君の友人の立場から、よく盡して下さるさ始終有難い感謝の念を抱いてゐたのである。君の病状を見た人々にはもつと早く、或ひは今日来るのでないか、さあやぶんでゐたのであつたが、さあやぶんで耐へて来たのは、たしかに夫人のみさりの結果であつた。昨日も主治醫の清水醫學生がたしかにさうださ進退して居られた程である。それから川井君の居間には、何時も米國で亡くなつた御父さんの寫眞と、亡き奥さんの寫眞がかけられてゐた。今の奥さんが来れば、それから亡き奥さんの寫眞は遠慮されるかと思へば、さあやぶらず、最後までそのまゝであつた。それで今の奥さんは少しも差支へなかつた。吾等から見れば夫としては少くは差支へてもよかりそうに思はれて仕方がなかつた。良人を深く理解されてゐる奥さんの御心遣は眞にゆかしいものがあつた。かやうな人こそ眞に愛の女神ではないか。吾等も平素心の内で思ひ、又友達同志で語り合ふのであつた。こんなやうな夫人にみされながら逝かれたことは、君も本懐を盡したに相違ないと思ふ。

●最後に君の墓を偲びたい、一言にして盡せば君の墓の〇の程度であつた、吾等同人は墓が好きであ

る、然し君のすきぶりは人並はずり居た。君から墓盤や石を取去る事は、君から御飯を取上げるやうに慘酷だと思はしめる程に好きであつた。それ程であるから上達も早かつた、自分の家を棋仙館と稱し、毎年秋の頃一回棋仙の集ひを稱して同好の士を自宅に招待し、二日に渉り大茶會を開催された。●墓の爲には幾ら金を使ふさといふはなかつた。亡き和子さんにも自ら墓を教へんのか、つたが六七歳の頃から教へて、つたが六七歳の頃から熱心過ぎてビシヤリ愛護のたまを扇子で叩いたことがあつた。●それ以來は御父さんが和子さんに「和子君をうたう」といふて和子さんは逃げまはつてゐた。今の奥さんとの結婚も墓を覺えさせる覺えるといふのが第一條件であつた、そしてさういふのが六七年までこぎつけた。●こんな熱心に墓に精進され墓の發展に盡力されたので、日本墓院は此の三月君の技倆と功勞に酬ひ初段の免狀を下附されるに至つたのである。●こんなにすきでも世間にあるやうな墓の爲に仕事をなほざりにするやうな事はみぢかくなかつた。●こゝろに實に偉かつた。吾等は實によく友を喪ふて失望落胆した。地方境界は待たぬ！然しもうさうする事も出来ぬ、死生は人生の常事であらうやう。君はもう今頃亡き夫人と和子さんと三人であつた。●世で一家團樂、樂しくしてゐられるだらう、さう思ふてせめてもあきらめにする。

●嗚呼！君は強く人生に生きて、死ぬまで生きる事に一所懸命であつた。わづかの苦勞や逆境で、こたれる人も多い、そんな人に君のつめあかでも煎じて飲ませたいのである。「朔風に匂ふ梅の力かな」の一句う君の人となりを歌ふてゐると思ふ。

●君は死んだ、君は死んだが吾等の心の内には君は生きてゐる。天地は悠久だ、古今は永遠だ。君よ！靜かに眠つて呉れ給へ。